

序

遠い昔に遠隔地の間を結ぶ商業として誕生した市場経済のシステムは、今や世界中を覆い尽くそうとしている。今世紀初めに起きたロシア革命のあと、ロシア、東ヨーロッパ、中国などは計画経済システムを樹立して市場経済に背を向けようとしたが、いずれも世紀末を待たずにその試みを放棄し、再び市場経済の軍門に下った。

私たちはいま、市場経済がかつてないほど深く浸透した世界に暮らしている。遠隔地間の商業として市場経済が誕生したころは、各地の特産物などが商品として売り買いされるにすぎなかったが、今では生活必需品を含めほとんどあらゆる物を私たちは市場を通じて入手している。そればかりでなく、労働やサービス、資金、土地、発明や工夫を応用する

権利（知的所有権）、企業の所有権、危険に対する保障（保険）など、私たちの社会生活におけるほとんどあらゆる事象が商品として市場で売買されているのである。

市場経済の発展は、科学の発展とともに、近代以降の人類の繁栄をもたらした源であることは疑いなく、その成り立ちについて知りたいと思うのは自然なことである。だが、私たちは市場経済に首までどっぷり浸かった生活を送っているために、かえってそれを客観的に見る事ができない。むしろ、目を過去の世界や外の世界に転じて市場経済がどうやって社会を包み込んできたかをみることで、自分たちを包み込んでいる市場経済というものをより客観的に理解できるのではないだろうか。あたかも生物学者が卵から胚が発生してくる過程を観察することで生物の体の構造を理解しようとするように、われわれも市場経済が発生してくる過程をみることで、市場経済の成り立ちに対する洞察を得られるはずである。

その点で、かつて市場経済に背を向けて計画経済システムを採用した国々が市場経済を取り入れてくる過程は、市場経済の発生過程を示す一つの例として非常に興味深いものであろう。なんとと言ってもそれは今まさに進行中のプロセスなので、古代ローマ帝国での遠隔地商業や十七世紀イギリスにおける資本主義の誕生を研究するのと違って、いくらでも

情報が得られるというメリットがある。飛行機に数時間乗れば、市場経済の発生過程を担っている当事者をつかまえて話を聞くことができるのである。

本書は中国を対象に、市場経済の発生プロセスを調べてきた私のささやかな試みの一端を書いたものである。本書は中国における市場経済の発生過程の全体像を書こうとしたものではない。むしろ、全体像を書く作業は省略して、直接市場経済が発生する現場に降り立ち、そこで起きていることを観察し分析しようとした。

もともと市場経済は、一編の法律によってある朝突然始められるというようなものではない。それは人々の日常的なモノやサービスの売り買いという営みが織りなす社会的な織物である。この織物は国境に妨げられることなく、世界に広がっている。中国の市場経済の全体像といっても、それは本来国境を越えて広がる市場経済の織物を人為的に区切って、そこで起きていることを集計した姿にすぎない。動物の個体数の増減を調べても、動物の生殖のメカニズムはわからないのと同じように、集計した数字をいくら調べても、市場経済が発生するメカニズムはよくわからないだろう。本書ではむしろ市場経済の織物に顕微鏡をあてて一つ一つの産業や企業を観察することで、市場経済を織りなす織り目がどのような構造になっているか知ろうとした。

だから、中国経済の全体像を知りたいというむきには本書はあまり役に立たないかもしれない。しかし、本書で取り上げた事例から中国の他の産業や企業で起きていることを類推することはできると思う。私は市場経済の発生過程についての何か壮大な理論をうち立てようというつもりはない。むしろ本書を通じて市場経済の発生過程を観察することの面白さを少しでも多くの人に伝えられれば幸いである。